王さまに憑かれてしまいました２

登場人物紹介

イザーク

フェルテンの兄。
無愛想だが、
優しい性格。

マルセロ

コーネリアが働いていた
食堂の客。
他国からの旅人で、
自称作家だというが――？

フェルテン

コーネリアが
朝市で出会った
少年。

シモン

ホルテンの義妹。
近衛(このえ)第二騎士団の
副団長。

ユーリ

コーネリアの犬。

ルードビッヒ

戦争で亡くなった故国王。
コーネリアの守護霊に
なると言って、
彼女にまとわりついている。

コーネリア

ホルテン領の町外れで
一人暮らしをしていた町娘。
流行病で両親を亡くして
天涯孤独の身だったけれど、
ルードビッヒに取り憑(つ)かれて
しまい……

ホルテン

コーネリアが住んでいた
土地の領主。
王宮で財務長官を
務めている。

アレク

コーネリアが施設にいた頃
親切にしてくれた青年。
コーネリアの初恋相手。

王都ローディアの貴族街の一角に、ホルテン侯爵邸はある。大きな邸ばかりが立ち並ぶ中でも、特に立派な邸宅だ。

その邸の一室で、十六歳の平民少女コーネリア・サンダースは書類に目を落としていた。

「コーネリアさん、ちょっと」

ノックの音とほぼ同時にドアを開けたメイド仲間に呼ばれて、コーネリアは書類から顔を上げる。そのまま部屋に入ってきたのは、コーネリアより十歳ほど年上の女性。豊満な体をメイド服にきっちり包んだキリリとした美人だ。

真っ直ぐ窓辺に寄った彼女はちょいちょいとコーネリアを手招きする。小さくため息をついたコーネリアは、諦めたように立ち上がり、彼女のそばに寄った。

ここは二階で、すぐ下は大きな玄関ポーチだ。薄いカーテンの向こうに、ポーチにつけた立派な馬車と、その脇に立つ金ぴかの服を着た男が見える。

「あの方が侯爵さまに面会を求めていらっしゃるのだけれど……」

どうしたらよいかと意見を求めているらしい。

またか、とコーネリアは思った。

（陛下？）

心の内でそっと呼びかけながら、視線を天井に向ける。

美しい文様が彫り込まれた高い天井には、クモの巣ひとつ張っていないし、虫の一匹も飛んでいない。

しかしコーネリアの目は、彼女以外には誰にも見えない存在――幽霊の姿をとらえていた。

幽霊の正体は、なんとこの国の前国王ルードビッヒである。

偶然、死にそうになっていたルードビッヒを見かけたコーネリア。まさか相手が王さまだなんて知らずに、彼の無事を祈った。

コーネリアの祈りもむなしく命を落としてしまった彼だが、彼女の優しさに感動し、守護霊になると言って取り憑いてしまったのだ。

以来コーネリアは、次から次へと面倒ごとに巻き込まれる日々を送っている。

その結果、なんと生まれ育ったホルテン領を離れ、領主である侯爵と共に王都にまでやってくるはめに。彼女は今、王都にあるホルテン侯爵邸で住み込みのメイドとして働いているのである。

それはさておき、コーネリアの心の声を聞いたルードビッヒは、窓をすり抜け外へ出た。ポーチの金ぴか男を確認してからフヨフヨと戻ってくる。

（フム。……馬車の紋章とあの外見から見るに、ガイエット男爵家の次男だな。派手好きで素行が悪いと評判の男だ。大方、親に言えない借金をして、ホルテンに金の無心にでも来たのであろう。

ホルテンとは同年代でな。学舎時代に共に学んだとかなんとか言って、一方的に友人気取りでいる傍迷惑な男だ。ホルテンも嫌っておる。追い返してかまわないだろう）

それを聞いたコーネリアは、美人のメイドに向き直った。

「門前払いで大丈夫です」

「やっぱり！　そうだと思ったのよね。でも、万が一にでも大事なお客さまだったら、侯爵さまに怒られちゃうし――コーネリアさんのお墨付きなら、安心だわ」

ありがとうと礼を言って、美人メイドは部屋から出て行く。

コーネリアはちょっぴり複雑な気分で、再びため息をこぼした。

「私、ここでは新人のはずですよね？」

（まあ、仕方あるまい）

コーネリアから微妙に視線を逸らし、窓の外を見るルードビッヒ。

青空の下――そこには、ホルテン侯爵家の紋章旗とローディア国旗がさわやかな風に吹かれて翻っていた。

王都に出てきて、しばらくが経った。現在彼女は何故か、王都のホルテン侯爵邸を訪ねてきた客の品定め役を一手に引き受けている。

新人のはずのコーネリアにこんな役目が回ってきたのには、当然理由があった。

（全部陛下のせいですからね）

ジトッとコーネリアに睨まれ、自覚のあるルードビッヒは露骨にうろたえる。

（いや、しかしあれは、不可抗力というか――）

ブツブツと呟きだす故国王の姿に、コーネリアは大きく息を吐き出す。そして諦めの境地に立ちつつ、自分が品定め役になった原因である出来事を思い出した。

王都へ来たものの、コーネリアの雇い主であるホルテン侯爵はなかなか王宮へ出仕しようとしなかった。邸でもくもくと仕事し、休日にはコーネリアの外出に同行することもあった。ちなみにその日、コーネリアは友人のイザークやフェルテン、そしてホルテンに、あるウソを話した。

自分が平民ではありえないほどの知識を持っているのは、ルードビッヒが落とした記憶のオーブと呼ばれる球を拾い、取り込んでしまったせいだと。彼らは多くの知識を持つ彼女を不思議に思っていたようだが、そのウソを信じてくれたのでコーネリアはホッとしたのだった。

それはさておき、いつまでも出仕しないホルテンに王太子アレクサンデル直々の登城命令が届いたのは、その休日から数日後のことだった。

王太子の命令に反するわけにもいかず、泣く泣く執事のジムゾンを連れて出かけて行ったホルテン。一度出仕すれば、溜まりに溜まった仕事を片付けるまで当分帰って来られないのは、わかりきったことだった。

ホルテンもジムゾンも留守の侯爵邸に、コーネリアの知り合いはいない。まだほかの使用人仲間とは打ち解けていなかったコーネリアは、なんとなく寂しいような心もとないような気持ちを抱えて、一日を過ごした。そうして慣れない仕事をなんとかこなし、ベッドに入ったのだ。

しかし心細いからかなかなか寝付けない。知らず知らずのうちに、自分はずいぶんとホルテンを頼りにしていたらしい。ちょっぴり反省しながらも、ようやく彼女がウトウトとしだした頃。

（コーネリア、起きろ。ユリアヌスが警戒しておる。――外もざわついている。何かが起こるやもしれぬ）

ユリアヌスとはコーネリアが飼っている犬のことで、邸の外にある犬舎にいる。

コーネリアは、普段とはまるで違う緊張をはらんだ故国王の声に叩き起こされた。

（えっ――陛下？）

邸の中はシンと静まり返っている。不穏な動きなど何も感じられない。

（階下に行け！）

しかし、鋭い命令の言葉を残して、ルードビッヒはそのままスッと窓をすり抜けて外へと出て行ってしまった。

コーネリアは起き上がり、寝巻の上からガウンを羽織って部屋を出ると、命令通り急いで階段を駆け下りる。

王都の侯爵邸は、深夜といえども各所で魔道具の照明灯が淡い明かりを灯していた。

下りた先は、立派な玄関から続く広いエントランスホール。

当然ここも、仄かな明かりに照らし出されている。

人の気配を察したのだろう。一階の奥の部屋から、今夜の夜勤についている壮年の使用人男性が現れた。

「サンダースさん。どうしましたか？」
「あっ、えっと……なんだか、外が騒がしいみたいで」
コーネリアの言葉に、男性は玄関のほうをうかがい、首を傾げる。
美しく磨き上げられた大きな玄関扉の外からは、騒がしさなど少しも感じられない。
「特に物音はしませんが……？」
男性が言いかけた、その瞬間だった。玄関扉にドンと何かが当たる音がする。
それと同時に、コーネリアにしか見えないルードビッヒが、勢いよく扉をすり抜けて中に入って来た。
（コーネリア、すぐに扉を開けろ！）
故国王は、そう叫ぶ。
続けてドンドン！　と、ノックにしては大きな音で扉が叩かれた。
「こんな夜中に、いったい誰だ？」
物音に驚いた使用人の男性は、警戒心もあらわに扉を睨む。
コーネリアは急いでその脇を駆け抜け、ドアに近づいた。
「あっ、何を!?」
使用人の男性が戸惑い躊躇ううちに、コーネリアは素早く閂を外し、扉を開ける。
その直後、外から黒い影が滑り込み、あっという間に扉を閉めた。
侵入者は、黒いフードを深くかぶった背の高い人物だ。その人は手早く閂までかけてしまう。

「何者だ!?」
誰何する使用人。
一方のコーネリアは、わけのわからぬうちに、その侵入者に囚われてしまった。
「騒ぐな！　侯爵を呼べ」
キラリと光る刃物をコーネリアに突きつけ、侵入者は使用人に命じる。低い男性の声だ。
侵入者に羽交い締めにされたコーネリアは……心底、困ってしまっていた。
何故なら、目の前にルードビッヒがフヨフヨと浮かび――
（こらっ！　何をしている、コーネリアを離せ！　離さぬか、シモン！）
そう言いながら、侵入者に掴みかかろうとしては、すり抜けているからだ。
かなり笑えるシーンだし、どう考えても二人は知り合いにしか見えない。
（……どなたですか？）
頭痛をこらえながら、コーネリアはルードビッヒにたずねる。
（こやつは、シモン。……シモン・ヴェラ・クロル。伯爵令嬢で、近衛第二騎士団の副団長だ。声は変声の魔法で男のものに変えているようだが、間違いない。シモンにとって魔法を使うことなど簡単なことだからな）
この世界には魔法を使える者が存在するが、それは高位貴族の中のごく一部の話。しかし、魔法を使えない者でも、魔石と呼ばれる石を使えば、魔法と同じ効果を得られる。ただ、とんでもなくお金がかかるので、平民少女のコーネリアには縁遠いものだった。

それにしても、いったい全体どういう理由で、近衛第二騎士団副団長なんていうお偉いさまが、真夜中に侯爵邸に押し入るような事態になっているのだろう？

「……侯爵さまはお留守です。離していただけませんか、クロル副団長さま」

疲れたように……というより、心底疲れてコーネリアは言った。

驚いたのか、侵入者の腕の力が緩む。

ゆっくりとした動きで、コーネリアはその腕から離れた。

「なっ!?　――本当に、シモンお嬢さまですか？」

使用人の男性が驚きの声を上げる。

近衛第二騎士団副団長は、ホルテンの亡くなった妻の妹。つまりは、ホルテンの義妹だ。そのため、ホルテン侯爵家の使用人は全員、彼女を「シモンお嬢さま」と呼んでいるという。

コーネリアは、クルリと振り返った。

動きを止めた侵入者が、少し躊躇ったあとにマントのフードをハラリと落とす。

すると黒いフードから、長い白銀の髪がサラリとこぼれ落ちた。

あらわになった白皙の肌に美しい紫の瞳。

しかし、その肌は泥で汚れ、マントの下の細い体は、労働者階級の平民が着る作業着に包まれている。

そこにいるのは、平民に見える男だった。一見しただけでは絶対お嬢さまなどには見えない。

コーネリアとて、羽交い締めにされた時に背中に当たった柔らかな感触がなければ、いくらルードビッヒに言われても、目の前の相手が女性だとは到底思えなかっただろう。

（食堂の女将さんが酔って抱きついてきた時と、同じ感触なんだもの。もっとも大きさは、女将さんのほうが大きいけれど）

コーネリアは、そんなことを思い出した。

仄かな明かりが照らす下で、ナイトウェアにガウンを羽織っただけのコーネリアは、お嬢さまはもちろん騎士にも見えない人物――シモン・ヴェラ・クロル伯爵令嬢と対峙する。

二人のそばでは、使用人の男性がおろおろとしていた。

「何故、私の正体がわかった？」

シモンは、当然の疑問をコーネリアにぶつける。

彼女は、侯爵邸の使用人でさえすぐに正体を見破ることができないほど、完璧な変装をしていた。

なのにそのメイドは、怯えもせず、即座に彼女をシモンだと断定した。

これで不審に思わないはずがない。

シモンは、コーネリアを鋭い視線で睨みつけてきた。紫の瞳の中には、コーネリアの返答次第では彼女を斬って捨てることも厭わないような、真剣な覚悟が見える。

コーネリアは、少し怯えながらもしっかりシモンを見返した。

「私は、先日ホルテン侯爵領より王都に出てきたばかりのメイドです。お客さまに粗相があってはいけないと思い、当家にお出でになられるかもしれないお客さまについては、あらかじめ教えていただいておりました」

こんなこともあろうかと用意してあった返事を、スラスラと口にする。
この答えは、あながち嘘でもなかった。
ホルテンと共に王都に来ると決まってから、コーネリアは侯爵邸で働く際に必要になると思われる事柄を一生懸命勉強した。当然、その中にはホルテン侯爵の交友関係や相手の人物像――シモンの情報もあった。
教師は、ルードビッヒである。
ルードビッヒが教師として相応しかったかどうかは、この際気にしないでいただきたい。コーネリアに選ぶ余地などあるはずもないのだから。
そんな彼女の返事を聞いた使用人の男性は、驚きながらも感心したような表情をコーネリアに向けた。
きっと、彼は根が素直なのだろうと、コーネリアは思う。
しかし残念ながら、女だてらに近衛第二騎士団副団長などという役職を務めるシモンは、そんな素直な性根ではなかった。
「ほう～？」
低く、語尾の上がった言葉が赤い唇から漏れる。
彼女の紫の瞳から、不審の色は消えなかった。
それもそうだろう。いくら事前に勉強をしたからといって、今この状態でただのメイドがシモンの正体を見破るなんてことは、相当難しい。

実際、ルードビッヒが教えてくれなければ、コーネリアだって気づけたはずがない。
コーネリアは……内心、冷や汗ダラダラだった。
（無理です、陛下！　いったいどう言い訳したらいいんですか？）
藁にもすがる思いで、コーネリアはルードビッヒに助けを求める。
しかし彼は困り顔で考え込むと、両の掌を上に向けて肩を竦めた。
（シモンは疑り深い性格だからな）
そんな疑り深い人間を、中に入れるように指示しないで欲しい。
なんとかならないかとコーネリアは焦った。
その時、運がコーネリアに味方する。
シモンが口を開いた途端、ドンドン！　と、再び玄関の扉が叩かれたのだ。
「王都警備隊の者だ！　扉を開けろ」
外から大声が響いてくる。
シモンは、チッと舌打ちをした。そのまま音を立てずに動き、スッと物陰に隠れる。
「誰か来たかと問いかけられたら、誰も来ていないと答えろ」
彼女は指示だけ出して、姿を消した。
どうしたものかと首をキョロキョロと回す使用人男性を見て、コーネリアは覚悟を決める。
今夜のこの事態を招いたのは、自分とルードビッヒである。ならばそれを収めるのも自分達であるべきだ。

（陛下、なんとかなりますか？）

たずねれば、フヨフヨと浮いていた故国王陛下は、今度は力強く頷いてくれる。

その姿に力を得て、コーネリアは再び玄関の扉を開いた。

「遅い！　何をしていた!?　誰か不審者がこの邸に来なかったか！」

いきなり怒鳴りつけられて、コーネリアは、思わず体をビクリと震わせてしまう。

玄関先に立っていたのは、おそらく衛兵だろう。きっちりと鎧を身に着けた筋骨隆々の男だった。

彼の背の高さはホルテンほどではないが、それでも充分高く、横幅もがっしりとしている。例えるならば、熊とでも形容されるような大男だ。

扉を開けた途端にこんな熊、もとい男と出会っては、コーネリアでなくともびっくりして怯えるものだろう。

しかも、その男の背後にも、同じような体格の衛兵が数人控えている。

扉の取っ手を握るコーネリアの手は震えた。

（……このまま扉を閉めたら、怒られますよね？）

（しっかりせんかっ、わしがついておる！）

恐る恐るたずねる彼女に、活を入れるルードビッヒ。

しかし、ルードビッヒが〝憑いて〟いることは、限りなく頼りにならないものだと、コーネリアはこれまでの経験上知ってしまっている。

彼女の手の震えは、なかなか収まらなかった。

そんな彼女のあまりの怯えようを目にし、衛兵はわずかではあるが声のボリュームを落とす。

「あぁ……その、我らは、本日この隣の地区で夜警に当たっている王都警備隊第三班の者だ。そこで不審者を発見し、ここまで追いかけて来た。この邸付近で不審者の姿を見失ったのだ。夜分に失礼ではあるが、邸内の捜索を行わせてもらう」

怒鳴ってはいないものの、言葉の内容は依頼ではなく一方的な宣告だった。

コーネリアは慌てて、首をふるふると横に振る。

「当家には不審者なんて来ていません。どうかほかをお当たりください」

取っ手をしっかり握りしめながら、必死の思いで訴えた。

「不審者がいるかどうかを見極めるのは、我々警備隊の仕事だ。お前に聞いておるのではないっ」

再び声を荒らげる衛兵。

思わずコーネリアは身を竦めた。

「……と、当家はホルテン侯爵の住まいです。主人は今王宮で、邸内にはおりません。いくら王都警備隊の方々とはいえ、主人の留守中に勝手に邸にお上げするわけにはまいりません」

コーネリアを助けようと思ったのだろう。彼女の後ろから、使用人の男がビクビクとしながらも声を上げた。

ホルテン侯爵の名前に、衛兵達は顔を見合わせる。

彼らはヒソヒソと話し合いを始めた。

（なんとか、諦めてくれるでしょうか？）

その様子にコーネリアは少し期待を膨らませる。
しかし――
（いや、無理だろう。ホルテンと王都警備隊隊長のトーレスは、仲が悪い。警備隊の誇りである正装につける金糸の飾緒の本数を、ホルテンが経費節減のために減らしたからな。隊員も全員ホルテンを恨んでおる）
ルードビッヒは、コーネリアの期待を無残にもペシャンコにした。
（そんなぁ～……私怨みたいな理由で、王都の衛兵が判断を左右されるんですか？）
コーネリアは心の内で嘆く。
（遺憾ではあるが、それが現実だ）
ルードビッヒは本当に残念そうに言った。
そして、彼の言葉はその通りになる。
「どなたのお邸であろうとも、我らが捜索の手を緩めるわけにはいかない。さっさとそこを退き、我らを中に通せ！」
衛兵はますます居丈高に言い放った。
誰の邸でもなどと言いながら、その態度は先刻よりはるかにやる気に満ちているように見える。
まさか捜索にかこつけて、ホルテンの邸の粗探しをするつもりなのだろうか。
（ど、どうしましょう？　陛下っ）
今にもコーネリアを突き飛ばし押し入ってしまいそうな衛兵達。

しかし、衛兵達の背後に目をやったルードビッヒは、フフンと鼻で笑った。
（安心しろコーネリア。そなたにとって一番頼りになるボディガードが、すぐそこに来ておる。いいか、こう言ってやるのだ。「お前達のような雑魚の手など不要だ。後ろを見るがいい！」と）
……相変わらずルードビッヒの言葉は、コーネリアを更なるピンチに陥れそうなものだった。
とはいえ、ボディガードという言葉に、コーネリアは思わず安堵の息をこぼす。ルードビッヒの言葉の意味が、コーネリアにはちゃんと伝わったのだ。
彼女は、スッと背筋を伸ばす。
「えっと……その、ご心配はありがたいのですが、本当に当家は大丈夫なんです。不審者なんてこの邸に入れるはずがありません。……あの、う、後ろを見ていただけますか？」
背筋は伸ばしたものの、言葉はどうしても遠慮がちになってしまった。
（違う！　違うぞっ、コーネリア。もっと偉そうにせんかっ！）
（そんなっ……できるはずがないでしょう!?）
コーネリアとルードビッヒは、漫才のようなやりとりを心の声で繰り広げる。
そんなことを知るはずもない衛兵達は、彼女の言葉に多少ムッとしながらも、言われたとおりに後ろを向く。
「こんな闇夜に、いったい何を見ろというの――」
衛兵の一人がバカにしたように声を上げたが、その言葉は急に途切れた。
暗闇に、煌々と二つの青い光が浮かんでいたのだ。

「ひっ！」
衛兵達が息を呑む。
パリッ！　と乾いた音がして、雷のような細い稲妻が闇に走った。
闇の中に沈む黒い獣の姿が一瞬浮かび上がる。
「なっ！」
衛兵は、慌てて剣に手をかけた。
（コーネリア、お前のボディガード――ユリアヌスを呼んでやれ）
落ち着いた声でルードビッヒが指示を出す。
……そう、衛兵達が誰一人気づかぬうちに、コーネリアの犬であるユリアヌスが彼等の背後に忍び寄っていたのだ。
「ユーリ、おいで」
ユーリことユリアヌスを呼ぶ、この場にそぐわぬ優しい少女の声が響く。
その途端、闇に潜んでいたユリアヌスは、助走もなしに軽々と衛兵達の頭上を跳び越えた。
黒い獣がコーネリアの傍らに音もなく着地する。
邸内の明かりに浮き上がった体は、闇そのもののような漆黒だった。
ユリアヌスの青い瞳が、静かに衛兵達を見据える。
熊みたいな大男が、一歩二歩と後退った。
（ユリアヌスがレインズの魔犬であることを教えてやるがよい。レインズは知能も戦闘力もかなり

優れた犬種だ。その戦闘力は魔力がなくとも人間の二、三人分に相当する。ましてや魔犬であれば、その力は一個小隊にも匹敵すると言われておる。聴覚も嗅覚も人の何倍も優れたレインズがいる邸に、不審者が入り込んだなどと言い張るバカはおるまい）
ニヤリと口角を上げて、ルードビッヒは笑う。
実際にはシモンが入り込んでいるのだが、ユリアヌスは彼女を不審者とみなさなかったのだと思われた。
（陛下がクロルさまを知っておられたのだもの。きっとユリアヌスも知っているのよね）
だからユリアヌスは吠えなかったのだろう。
ユリアヌスは元々、ルードビッヒが飼っていた犬だ。今は、彼が憑いているコーネリアを主人と認め、飼われている。
コーネリアは、賢い犬の頭にそっと手を置いた。
「ご覧の通りレインズの成犬です。しかもこの犬は魔力を持っています。……当家に不審者など入り込めるはずがありません」
胸を張り、真正面から衛兵と目を合わせ、コーネリアは話す。
「もしも当家に主の許しなく立ち入る者あらば、即座にその者はレインズの牙にかかることでしょう。……もし、どうしてもとおっしゃるのならば、実際にレインズの実力をお見せしてもよろしいですよ？」
衛兵達の顔から、サッと音を立てる勢いで血の気が引いた。

彼等とて衛兵の端くれ。軍で飼われているレインズの力は充分に知っている。
たとえどれほど分厚い鎧を着ていても、レインズに噛まれてはその鎧ごと体までひしゃげてしまうのだ。レインズは脅威以外の何物でもなかった。
しかも目の前のレインズは、魔力も持っているという。
「あ、いや……その必要は」
男達の額に脂汗が浮かんだ。
ユリアヌスの視線は、彼等を真っ直ぐ射抜いている。
「ユーリ……」
コーネリアが、ユリアヌスに話しかけようとした瞬間。
「うわっ！」
「やめろっ、よせ、もうわかった！」
「不審者は貴家には、いない！　絶対、いないっ！　我らはほかの場所の捜索に当たる！」
「失礼っ――」
真っ青になった衛兵達は、口々に叫びながら我先にと逃げていった。
コーネリアは、ポカンと口を開ける。
（ハハッ！　いいざまだ）
ルードビッヒが愉快そうに腹を抱え、大笑いした。
「え？　なんで……そんなに怖がらなくてもいいのに……ねぇ？」

想定外の衛兵達の反応に、コーネリアは首を傾げ、ユリアヌスに同意を求める。
ユリアヌスは……大きなあくびをした。
そして衛兵達が去ったあと、邸内を探してみたのだが、シモンの姿も消えていた。
（わしらが衛兵とやりあっている間に裏口からでも逃げたのであろう。捕まっては元も子もないからな）
逃げ足の速い伯爵令嬢だった。
（いったいどうして、近衛第二騎士団副団長なんていうお方が、衛兵に追われるような事態になったのでしょう？）
（フム……恐らく、潜入捜査か何かの最中だな。身分を偽って胡散臭い場所を調査しているところで、衛兵と出くわしたのであろう。正体を明かせば衛兵から逃れられるが、それまでの捜査は白紙に戻る可能性もある。結果、シモンは逃げ出すことにした――というところだろうな）
（副団長自ら、潜入捜査なんてされるんですか!?）
コーネリアはびっくりする。
そもそもシモンは身分の高い女性だ。ホルテン侯爵の義妹が軍に入っていると知ってはいたが、実際にそんな危険な任務をしているだなんて思ってもいなかった。
（シモンは優秀だからな。魔力の高さでは近衛の中でも群を抜いておる。……とはいえ、シモンが動くとなれば、おそらくその任務を依頼してきたのは、かなり身分の高い者だろう。単独行動のようであったし。秘密裏に命を受けたといったところか……）

考え込むルードビッヒ。
コーネリアの脳裏に、思いつめたアレク――王太子アレクサンデルの横顔がフッと過る。
アレクは、コーネリアが両親を亡くし養護施設にいた時に出会った、初恋の人だ。ルードビッヒのおかげでアレクの正体を知ったものの、コーネリアは今でも彼に淡い想いを抱いている。
（あんなにユーリを欲しがっていたんですもの。アレクの立場はたいへんなんですよね。王宮は、権謀術数が渦巻いている場所なのでしょう……）
コーネリアには、いつも優しかったアレク。
そんなアレクが、人を陥れたり騙したりするような宮廷の醜い争いの中で生きているなんて、彼女にはとうてい信じられない。それでも、アレクが王太子である限り、そうでないはずがなかった。
シモンは、アレクの命を受けて動いていたのかもしれない。
そう考えて暗くなるコーネリアの手に、湿った鼻が押し付けられる。
「ユーリ」
（おおっ。そうだコーネリア。ユリアヌスを褒めてやれ。レインズにとって主人からの褒め言葉は何よりの褒美になる。ユリアヌス、よくやったな！）
ルードビッヒはことさらに明るく言いながら、フヨフヨと漂ってユリアヌスに近づいた。そしてすり抜ける手で、目一杯に黒い頭を撫でる。
ユリアヌスの表情はピクリとも動かない。しかし尻尾が、かすかに揺れている。

コーネリアは、クスリと笑う。
「ユーリ、ありがとう。すごくカッコよかったわよ！」
もちろん、コーネリアもルードビッヒに負けないくらいたくさんユリアヌスを撫でてやった。
今度は、はっきりと大きく尻尾が揺れる。
彼女は、ユリアヌスにギュッと抱きついた。
「――スゴイですね。コーネリアさん」
そんな彼女に、使用人の男が声をかけてくる。
「衛兵を追い払ったのもスゴイですが、よくシモンお嬢さまの正体がわかりましたね。何度もお会いしている私でさえ、さっぱりわからなかったのに」
純粋に驚く使用人。その様子には不審の色は見えない。
しかし、コーネリアは少し焦った。
「えっと、あの、その……あ、胸が！　そう、後ろから脅された時に、クロル副団長さまの胸が背中に当たったんです！　……と、当家を訪問なさると教えていただいた方の中に、女性は彼女しかおられなかったので」
しどろもどろで言い訳する。
それを聞いた使用人は、難しい顔で腕を組んだ。
「そうなんです。ご主人さまの女性嫌いも本当に困ってしまっていて――」
ホルテンの女嫌いが、侯爵家にとっていかに重大な問題かを切々と訴える使用人。

よほど困っているのだろう。話がズレていることにもかまわず延々と続く話に、コーネリアの顔は引きつった。

「――ですから、ご主人さまがコーネリアさんを連れていらっしゃった時には、みんなびっくりすると同時に期待したんですよ」

ニッコリ笑いかけられて、コーネリアは「え？」と目を丸くする。

「期待？」

「ええ。だって当家では、ウッツさま達のように代々侯爵家にお仕えする家系の方達以外は、基本王都の人間を雇ってますからね。なのに、コーネリアさんは、わざわざご領地からご主人さま自ら連れて来られたでしょう。しかも、うら若い女性ときた。……これはいよいよ！　と、みんな思っていたんですよ。……なのに、なんだかそんな雰囲気ではないので、首を傾げていたのですが……今のコーネリアさんを見て納得しました。これほど優秀なお嬢さんであれば、確かにご主人さまもお手元に置いておきたいと思われるはずです」

ウッツとは、ホルテンの優秀な執事ジムゾンの姓だ。

うんうんと頷く使用人の姿に、コーネリアはポカンと口を開けた。

（へ？　……普通は王都の人を雇うって……私みたいに領地から異動してくるのは普通じゃないの？　っていうか、期待ってなんの期待？）

「ご主人さまの女嫌いが直ったのでなかったのは、残念でしたが――」

「……え？　あ、すみません」

思わず謝ってしまうコーネリア。

使用人はとんでもないと首を横に振った。

「勝手に勘違いしたのは、こちらですから。失礼な目で見てしまい、申し訳ありません」

（まったくだ。コーネリアをそんな目で見ていたなどとは、許しがたい！）

謝る使用人をルードビッヒが叱りつける。もちろん、彼の声は使用人には聞こえていないのだけど。

（……失礼な目って、何？）

さっぱりわからぬコーネリアであった。

何はともあれ、シモンの正体を見破ったことを深く追及されなかったことは、ありがたい。

コーネリアは、ホッと息を吐き出したのだった。

――こうして、品定め役を頼まれることになったコーネリア。

その経緯を思い出していた彼女は、細い眉をひそめる。

どこをどう考えても、すべてルードビッヒのせいとしか思えない。

「コーネリアさん、ちょっと」

再び扉が開いて、今度は少し年配の女性が入ってきた。彼女は窓際に寄って、ちょいちょいとコーネリアを手招きする。

どうやら、また来客があったらしい。

（陛下！　なんとかしてください！）

コーネリアの声なき悲鳴に、耳を塞ぎながらフヨフヨと宙を漂うルードビッヒだった。

そんなこんなの日常が変化を見せたのは、それから少し経った頃だ。

広すぎる廊下に、高すぎる天井。そこかしこに魔法による照明が輝く気品溢れる空間を、コーネリアは歩いていた。

さりげなく置かれた、高価な家具や優れた美術品。

そのどれもが、コーネリアにははかり知れないほど価値のあるものばかりだ。

大理石の床は、当然塵ひとつなくツルツルピカピカ。すでにかなりの距離を歩いているというのに、まだ目的の部屋には着かないらしい。

コーネリアはこっそりため息をつく。

（大丈夫か？　コーネリア。ジムゾンの命令になど無理に従わなくともいいのだぞ。ホルテンもそう言っておったであろう）

――ここは、王国ローディアの中心ともいうべき王城。

コーネリアは、ジムゾンの命令で、城内の中枢部である九天と呼ばれる場所に来ていた。

コーネリアのまわりを、心配そうなルードビッヒがいつも通りフヨフヨと浮かんでいる。

彼女はそんな故国王にそっと笑いかけた。

（ありがとうございます。でも、私は侯爵家の使用人ですから、ウッツさまの命令に従わないわけにはいきません。……大丈夫です。ただ、自分があまりにも場違いな場所にいることに、気おくれしているだけですから）

気丈に背筋を伸ばそうとするコーネリアに対し、ルードビッヒの心配は晴れない。

彼は豪華絢爛な壁や天井を忌々しげに睨み付けた。

（再び、ここに戻って来るとはな……）

感慨深げにルードビッヒが呟く。

昨日、コーネリアはジムゾンから王城でホルテンの仕事を手伝うようにと急に命令されたのだ。

「本当は、これから宮中での作法を覚えてもらって、その後に城に上がってもらう予定でしたが、前国王陛下の記憶があるならばその必要はないでしょう。早速明日からでも一緒に登城してもらいます」

ジムゾンの言葉に、呆気にとられたコーネリア。一瞬ぽかんとしたあと、慌てて声を上げる。

「そんなっ、ムリです！　前国王陛下の記憶には、王宮の使用人の作法はありません。私に登城なんて、できっこありませんから！」

コーネリアの抗議を受けて、ジムゾンはニッコリと笑う。

「大丈夫ですよ。あなたが行く先は、ご主人さまの執務室。そこで、領地でしていたことと同じような書類の整理を、私と一緒にやってもらいます。本来そういった仕事をするのは、使用人よりも貴族の子弟が多いのですよ。つまり、あなたに必要なのは、使用人としての作法ではなく、貴族としての立ち居振る舞いになります。……故国王陛下の記憶があれば、なんの問題もないでしょう？」

グッとコーネリアは詰まった。

（……本当ですか、陛下？）

（ああ。確かに、中級以下の貴族の子弟や令嬢は、将来の仕事の勉強や行儀見習いも兼ねて、高官や王族の付き人になることが多い。……しかし、いまだかつて、ホルテンのもとにそういった者達が付いたという話は、聞いたことがないが――）

それはどう判断すればよい話なのだろう？

（財務長官というお仕事には、付き人は必要ないということですか？）

不安そうなコーネリアに対して、ルードビッヒは困ったように首を傾け、顎に手をやる。

（いや、違う。……ホルテンはクソ真面目だからな。今どきの甘やかされた貴族の子弟が、ホルテンのもとで働けるはずがないのだ。我が子こそ！　と、はりきって自分の子供をホルテンに送り込んでくる貴族は多いが、どいつも三日と持たなかったと聞いておる）

……そう言えば、実の子供であるコスタスでさえも、ホルテンから書類の見方を習おうとしなかったな、とコーネリアは思い出す。

真面目で厳格なホルテン。彼は決して、頭ごなしに叱りつけたり、相手の人格を否定するような怒り方をしたりはしない。だが、背が高く厳めしい顔つきの男が「ダメだ」と一度でも言えば、相手のダメージはホルテンが意図した以上のものになりそうだ。

（本当は、お優しくて繊細な方ですのに――）

（優しいというのはともかく、繊細だなどと思うのは、コーネリアくらいだ）

ルードビッヒは呆れたようにため息をつく。

そういう事情ならば、ホルテンは王宮で人員不足に悩んでいるのかもしれない。

（私なんかを王宮に連れて行こうと考えるなんて、きっと猫の手も借りたい状況なんですよね？）

考え込むコーネリア。

そこに、今まで黙っていたホルテンが口を挟んできた。

「コーネリア、無理をする必要はない。お前が城に来てくれれば私はとても嬉しいが、嫌なら断ってもかまわない。……お前は、私の願いを聞いて遠く王都まで来てくれた。仕事が終わり家に帰れば、お前が私を出迎えてくれる。今の私には、それで充分だ」

優しく低い声が、コーネリアを慮ってくれる。

コーネリアの胸は、ジンと熱くなった。この優しく繊細なご領主さまのお役に立ちたい！　と、心から思う。

（……それに、お城に行けば、今よりアレクのために何かできるかもしれないですよね）

想いを寄せるアレクの力になれる可能性があると思った途端、コーネリアの胸にやる気が湧く。

「大丈夫です、ご領主さま。お城でのお仕事、お引き受けいたします！　ふつつかものですが、精一杯頑張らせていただきます」

気づけばコーネリアはそう答え、よろしくお願いしますと頭を下げていた。

「ふつつかもの……」

ポツリと呟いたホルテンの顔が、いきなりボッと赤くなる。

背後でジムゾンが、グッと拳を握りしめていた。

（コーネリア、そなたはお人よしが過ぎるっ！）

ルードビッヒが頭を抱えこむ。

――というわけで、コーネリアは豪華絢爛な王宮の廊下をひたすら歩くはめになっているのだった。

勢い込んで来たものの、あまりに立派過ぎる周囲の様子に、気おくれしまくりのコーネリア。

それでも背筋を伸ばして歩いていられるのは、前を行くホルテンがきちんと彼女のことを考えてくれているからだ。

とはいえ、今この時、コーネリアがホルテンから優しい言葉をかけてもらえているのかといえば、決してそうではない。

無愛想で無口な男は、コーネリアのことなど振り向きもしない。真面目な顔で前を向き、カツカツと歩いている。

おかげで、背の高いホルテンの背中に阻まれ、ごく普通の身長である彼女は、前がよく見えない。

しかし、その事実にこそ、コーネリアは力づけられていた。

背の高いホルテンと、十六歳の少女として普通の身長のコーネリア。当然二人は、足の長さも違い……歩く速さも違うはずだ。

それなのに彼女は、先ほどから、急いで歩く必要が少しもないのである。いつもの自分の歩調で歩いている。

つまり、ホルテンが彼女に合わせて、ゆっくり歩いてくれているということだ。

さりげない優しさ。見上げるほど大きなホルテンの背中が、とてもたくましく感じられた。

それにしても、入城してから、もうずいぶん長く歩いている。

（この先に、ご領主さまのお勤めになる財務長官室があるのでしょうか？）

（いや。財務部とは方向が逆だ。この先は――）

コーネリアの問いにルードビッヒが答えようとした、その時。

「お義兄さま！」

喜色満面の女性らしく澄んだ声が、前方から聞こえてきた。

慌ててホルテンの大きな背中から顔を覗かせ、前を見たコーネリアは……廊下の少し先に、麗しくも凛々しい大天使の姿を見つける。

サラリと流れる、背中で緩く結んだ白銀の長い髪。

この世のものとは思えない、完璧な美貌。

透き通るような白い肌に、美しい紫の瞳が輝く。

背の高いほっそりとした肢体を包むのは、白を基調とした騎士の制服だ。金のフリンジのついた肩章と袖口の豪華な刺繍が美々しく、目を惹きつける。飾緒は深紅で、これは近衛騎士のしるしであることを、コーネリアは思い出した。

まるで物語から出てきた騎士か王子さまのような美青年が、そこに立っている。

まさしく神の御使いである大天使さまだった。

その姿は、女性ならば誰でもうっとりと見惚れてしまうのではないかというものだが――

見惚れているというよりは、驚いていると評した方が近い丸くなった目で、コーネリアはその人物をジッと凝視していた。
訝しそうにパチパチとまばたきする。
（え？）
だって――
コーネリアの目には、そのイケメン将校が着ている軍服の……胸の部分が膨らんでいるように見えるのだ。
（あまり大きくはないけれど。……そうね、食堂の女将さんよりは小さいわ）
そこでコーネリアは、近頃これと似た感想を抱いたことがあったな、とデジャブを感じる。
あれは、いつだっただろうか……？
（えっと？　……この方、女の人ですよね。声も高めで綺麗でしたし）
確認すべく、コーネリアはフヨフヨと浮いているルードビッヒに心の声でたずねる。
（――シモンだ。先日会ったであろう）
ルードビッヒは、呆れた様子で教えてくれた。
（シモンさま？）
そう、目の前にいる男装の麗人は、シモン・ヴェラ・クロル伯爵令嬢――以前、ホルテン侯爵邸に舞い込み、コーネリアに正体を見破られた、近衛第二騎士団副団長だった。
ついでに言えばホルテンの義理の妹である。

年はホルテンの五歳下で、二十七歳。
ホルテンが女嫌いになって以来、唯一そばに寄ることを許されているという希少な女性でもあった。
生まれつき高い魔力を持っていたので、十五歳で成人すると同時に近衛騎士団に入団することが決まっていたシモン。そんな彼女が、大好きな姉とホルテンの結婚式に出席するために入団式をすっぽかしたのは、王都では有名な話らしい。
姉が他界し、ホルテン侯爵家とクロル伯爵家に儀礼的な付き合いしかなくなった今でも、シモンだけは足繁く王都の侯爵邸に通っていた。
とはいえ、ルードビッヒが戦死したことが原因でホルテンが自領に引っ込んでしまったので、こしばらくはシモンも彼に会えていなかったのだが……
（だから、〝お義兄さま〟なんですね）
変なところで、コーネリアは納得した。
軽やかに駆け寄ってくるシモンの姿は、ものすごく優美である。まるで彼女のまわりだけキラキラと輝き、背景に花が飛んでいるかのようだ。
（……先日のお姿と、まったく違いますよ）
（シモンは変装していたからな）
何を当然のことを言っているのか、とルードビッヒはため息をつく。
確かにそれはそうなのだろうが――

（違いすぎでしょう!?）

コーネリアは心の中で叫んだ。

あの時見たシモンも白銀の長髪と紫の瞳ではあった。しかし顔は泥で汚れ、労働者階級の作業服に身を包んでいて、どう見たって平民の男だったのだ。

間違っても、今目の前にいる男装の麗人と同一人物とは思えない！

（他人に同一人物だと思われるようなら、それは変装とは言えないからな）

故国王陛下は至極もっともな説明をしてくれる。

しかし、コーネリアは素直に頷けなかった。

ルードビッヒの助言があったとはいえ……あの平民の男が伯爵令嬢だと、コーネリアは見破ってしまったのだから。

――シモンがコーネリアに不審を抱いたのは、もっともだった。

あの時の冷たい態度と剣呑な眼差しのわけが、ようやくわかる。

（……わかったところで、もうどうにもなりませんけれど）

（心配するな。そなたは外見からではなく、侯爵邸に訪れる女性がシモンしかいないという点から、正体を見破ったことになっているのだ。使用人とて、それで納得していたであろう）

それもどうかと思うコーネリアだった。

ホルテンの徹底した女嫌いが功を奏したと言えるのかもしれないが……

しかしどうやら、シモンの不審はいまだ晴れてはいないらしい。

蕩けるような笑顔でホルテンに近寄って来たシモンは、侯爵の後ろにコーネリアの姿を見つけた途端、ピタリと足を止めた。

信じられないとでも言いたげにコーネリアを見つめる。やがて、彼女の美しい笑顔は凍り付き、紫の目がキッとつり上がった。

バックに飛んでいた花が一転、ドロドロとした暗雲に変わったかのようだ。

（こ、怖い……）

コーネリアは思わず、体をブルッと震わせる。

王宮の広い廊下の一角に、使用人コーネリアを連れた背の高いホルテン侯爵と、男装の麗人シモン伯爵令嬢が並び立つ。

それはあたかも一幅の絵画さながらの場面である。

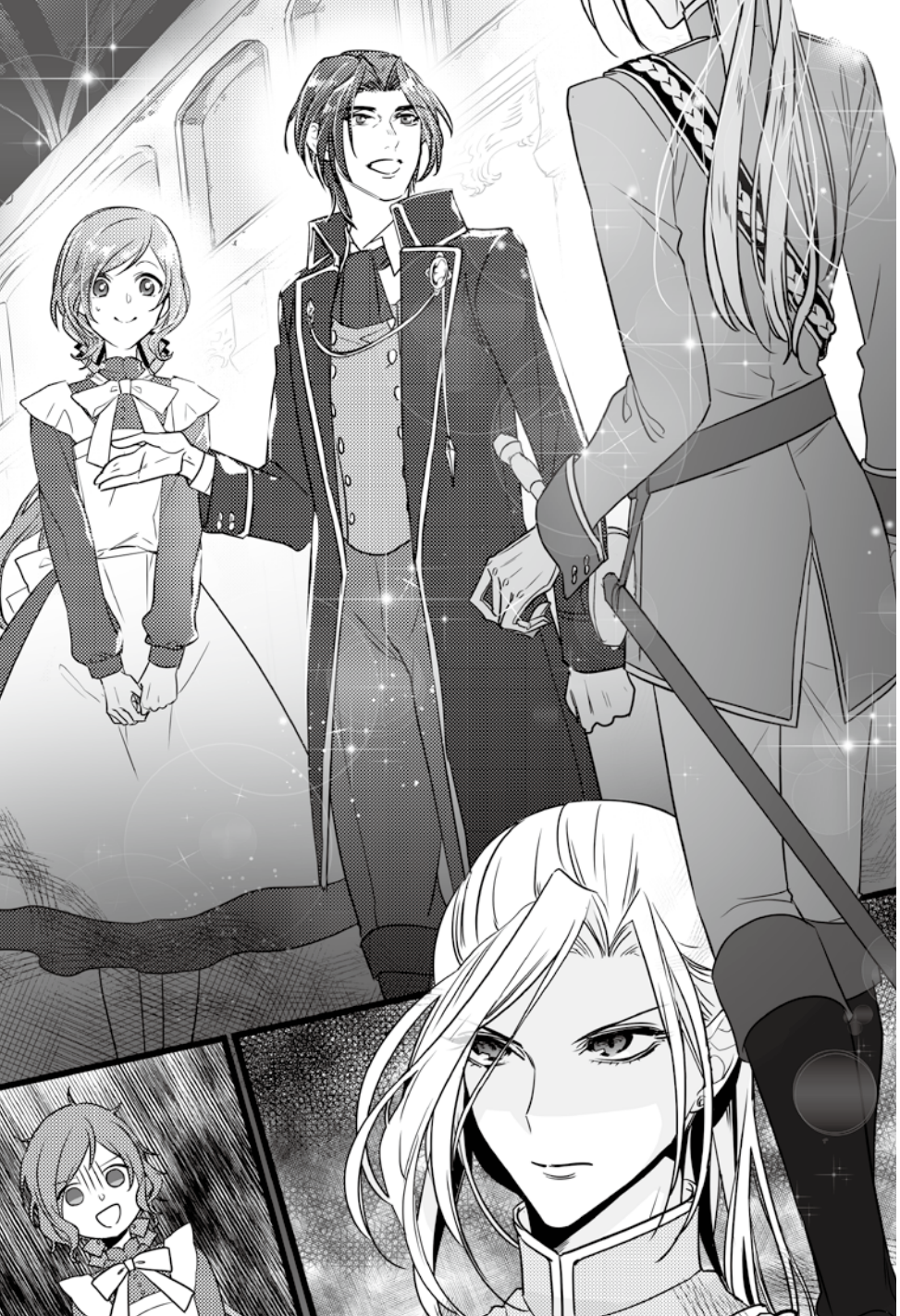
その様子を見た宮廷人達は、二人の邪魔をしないように距離を取り、頭を下げて通り過ぎる。財務長官である侯爵と近衛第二騎士団副団長の会話に入り込もうなどという強者は、さすがにいないようだ。

「シモン」

ホルテンは落ち着いた口調で、シモンに呼びかける。

「お義兄さま。彼女は――」

「ああ、シモンにきちんと紹介したくて、こちらに連れてきたんだ。彼女は、コーネリア・サンダース。先日会ったそうだから知っているだろうが、我が家の者だ。……今日から、私やジムゾン



と一緒に王宮に上がることになった。いろいろと教えてやって欲しい」
「っ!?　……王宮に？」
シモンは美しい紫の目を見開いた。
ホルテンは、肯定して頷く。
「そうは言っても、彼女は国に仕えるわけではない。あくまで私個人の付き人だ。彼女には私の仕事を手伝ってもらう。領地でもそうしてもらっていたのだ。ただ、王宮には王宮の決まりごとがある。ここにいるからには、それを無視するわけにはいくまい。私とジムゾンでほとんどは教えられるが、女性特有の習わしもあるだろう？　それを彼女に教えてやって欲しい」
「頼む」とホルテンが言う。その言葉に合わせ、コーネリアもペコリと頭を下げた。
シモンは、ギュッと唇を噛んで黙り込む。
――故国王ルードビッヒの記憶の一部を持っていると、ホルテン達に告げたコーネリア。
しかし、当然ながらそれは、国王から見た王宮の記憶だ。使用人や、まして女の身から見たものとは、かなりかけ離れている。
これは、ホルテン、ジムゾン……そしてルードビッヒも含めた共通認識だった。
しかも、王宮に暮らす女性の勢力関係は難しいらしい。
「使用人といえども、上手く立ち回らなければ、あっという間に周りは敵だらけになってしまいます」
そう言ったのは、ジムゾンだ。王宮での仕事についての話し合い中、ジムゾンは『女性とはどう

してああも陰湿なのか』と嘆き、ホルテンは嫌そうに顔をしかめた。
（……本当ですか？）
（ああ。宮廷で一番勢力を持つのは当然正妃だが、父親が宰相の第三妃も、大きな力がある。今は、その二派が争っている状況なのだ）
コーネリアの問いに、ルードビッヒは少なくとも自分が他界するまではそうだったと話す。
今後、正妃の産んだ王太子アレクサンデルが順調に次期国王となれば、勢力図は変わらないだろう。しかしアレクサンデルが失脚し、第三妃の産んだ第二王子が王位に就くとなると、逆転劇が起こる。
（アレクサンデルが妃を持てば、その者が新たに勢力図に加わり、力関係が変わるだろうが――）
王太子には、まだ正妃も側妃もいなかった。
彼に恋するコーネリアは、自分に望みがないとわかっていても、そのことに少しホッとする。
（宮中の女性間の勢力争いに、ホルテンは中立を保っている。まあ中立というよりは、関わりたくないから、どちらも拒絶しているといったところだがな）
正妃と仲の悪いホルテンだが、実は第三妃との仲も同じようなものだった。
（とはいえ、ホルテン侯爵家は国に多大な影響力を持つ有力貴族だ。財務長官を務めるホルテン自身の力も大きい。ホルテンは、女どもが隙を狙う、魅力的な獲物なのだ）
そんな事情のある王宮に飛び込む、ホルテン直属の使用人の少女。
――コーネリアが注目を浴び、女性達の標的となるのは、間違いない。

だから、ホルテンはその対策のため、シモンにコーネリアのことを頼もうとしているのだった。
（シモンは、女性に絶大な人気を誇っているからな）
遠い目でルードビッヒは呟く。
男装の麗人である近衛第二騎士団副団長シモン。下手な男よりもよほどカッコイイ彼女は、貴族婦人や令嬢にとって憧れの君なのだそうだ。
彼女のファンクラブは、王太子や第二王子のものより大きい。
それはそれでいかがなものか？　と思うコーネリアだった。
ともあれ、シモンの後ろ盾があれば、コーネリアの安全はとりあえず保障されるはずだ。
「シモン。お前が、彼女に疑念を抱いていることは知っている。お前の立場であれば無理のないことだろう。だが、彼女の身元については私が保証する。私を信じてくれないか？」
シモンの顔を覗き込み、真っ直ぐに目を見て頼むホルテン。
至近距離で厳めしいホルテンの顔を見て……シモンの白い肌は、真っ赤になった。
「お、お義兄さま……」
彼女の紫の瞳がうろたえる。
（……えっ？）
その様子を見たコーネリアは、内心びっくりした。
ホルテンの顔を間近にして、青ざめるのではなく赤くなるご令嬢を見たのは、はじめてだったりする。

そして、何より……

（へ、陛下。ひょっとして、シモンさまは――）

コーネリアの問いに、ルードビッヒはしっかり頷く。

（そうだ。シモンは、ホルテンに恋をしておる。――知らぬ者はホルテン以外は誰一人いない、王宮の公然の秘密だ）

ため息をつきつつ、ルードビッヒはそう言った。

女嫌いで有名な義理の兄に恋をする、男装の麗人シモン嬢。

相手に気づいてもらってもいない彼女の片恋だが、シモンに憧れるご令嬢やご婦人のみならず、王宮にいる者ならば国王から使用人まで、誰もが知っているトップシークレットだ。

それをトップシークレットと称してよいかどうかは、疑問の残るところではあるが……

「どうしたシモン、顔が赤い。熱でもあるのか？」

「いっ、いえっ！　大丈夫です。なんともありませんっ――」

恋愛物語ではテンプレとも言えるやりとりを繰り広げているホルテンとシモンを、コーネリアは呆然と見つめる。

丁度通りかかった男性が、またかと呆れたように目を伏せ、目礼をして通り過ぎる。

……どうりでみんなこの二人を遠巻きにするはずだ。こんなやりとりを目の前で見せつけられたいモノ好きはいないだろう。

（シモンは、ことホルテンに関してだけは、わかりやすいからな）

優秀でどんなことでもスマートにこなす彼女がうろたえ慌てふためくのは、ホルテンの前だけだ。

まさに一目瞭然。ギャップがありすぎる残念な姿は、見れば誰もがあちゃ～と額を押さえるほどである。また、シモンに憧れるご令嬢などはハンカチを噛み締めて悔しがるという。しかし当のホルテンだけが気づかない。

（……王宮七不思議の一つと言われておる）

まあ、ホルテンだからな、とルードビッヒも額を押さえる。

（で、でも、それならどうしてシモンさまは、ご領主さまにご自分の気持ちを告白なさらないのでしょうか？）

彼の妻が亡くなってからすでに十年以上経っている。いくらホルテンの亡き妻がシモンの姉だったとはいえ、ホルテンとシモンが結婚することに、醜聞など立つはずもないだろう。

むしろ、家同士のつながりを重視する貴族の中には、嫁いだ娘が早逝した場合、後添いに妹を差し出すケースも多々あると聞く。

女嫌いのホルテンも、シモンだけは例外として可愛がっているのだ。彼女が心から願えば、彼も頷く可能性がないとはいえまい。

（フム。理由はいろいろあるが……一番の理由は、ホルテンとシモンの結婚が、両家にとって何一つメリットのないものだからだろうな）

ルードビッヒの説明に、コーネリアはポカンとした。

（……メリット、ですか？）

（そうだ。ホルテン侯爵家とクロル伯爵家は、すでに一度婚姻関係を結んでいる。ホルテンの妻は亡くなったが、彼女の血を引く子供がおるため、両家の関係は消えていない。両家がこれ以上関係を深める必要はないのだ。クロル伯爵がシモンを結婚させるのであれば、ほかの有力貴族に嫁がせるほうが得だろう）

――この国における貴族の結婚は、純然たる政略結婚である。個人と個人が愛し合い結婚するなんてことは、ほとんどない。

ホルテンの最初の結婚も、幼い時から決められていた家同士の政略結婚だった。

ただ、だからといってまったく愛情が育めないかといえば、決してそうではない。

事実、ホルテンと最初の妻は、子供の時からお互いを大切にして、穏やかな愛情と絆をゆっくり築き上げてきた。

ほかに、結婚してから心を通わせる夫婦もいるだろう。

もちろん、相手に愛情を持てない夫婦も多い。しかしそういった場合は、互いに納得の上、家名を傷つけない範囲で、恋人や愛人を持つのが普通だ。

家のためにする結婚はその目的ゆえに、家に支障さえなければ、かえって自由がきくものなのである。

そしてそれが常識であるからこそ、ホルテン侯爵家とクロル伯爵家が再び婚姻することは考えられないのであった。

（ホルテンとシモンの結婚は、メリットがないどころか、両家に大きなデメリットをもたらすものでもある。婚姻関係が特定の家同士で重なりすぎると、そこに何かしらの密約や謀があるのではないかという疑惑を周囲に持たれるのだ。ホルテン侯爵家もクロル伯爵家も、勢力の強い名家。名家同士が必要以上に婚姻を重ねることは、下手をすれば、何か企んでいるのではないかと勘繰られる。果ては、国王に反逆の意思ありと邪推されることにもなりかねない）

たとえ両家にそんな意思が欠片もなくとも、疑惑を生んだということだけで、両家共に取り潰される可能性さえあった。

（高位貴族の結婚には、わしの――国王の許可がいる。たとえどれほどシモンが望もうとも、わしは許可を出さなかっただろうよ）

ルードビッヒは静かにそう言った。

平民とはかけ離れた貴族の婚姻事情に、コーネリアは言葉も出ない。

確かに平民であっても、家の付き合いや事情で、恋人でない者同士で結婚するケースは、ごまんとある。しかし、基本は恋愛結婚だ。

コーネリアの両親は幼馴染みで、ほのぼのジレジレ恋愛だったと聞いている。コーネリアは、酔っぱらっては娘に当時ののろけ話をしていたバカップル両親を思い出す。

（……シモンさま。お可哀相）

気づけば、コーネリアはポツンとそんな思いを漏らしていた。

コーネリアの目には、耳まで赤くして潤んだ瞳でホルテンを見上げるシモンの姿が映る。

その姿は、凛々しい騎士なのに、心の底から可愛らしいと思える。

なのに彼女の想いは、決して叶わない。
表情を曇らせるコーネリアに、ルードビッヒは複雑そうな視線を向けた。
（――そなたから見れば、我ら貴族はずいぶん非情な人間に見えるのだろうな）
苦い笑みが、彼の口元に浮かぶ。
（だがな、決してそうばかりではないのだ。その証拠に、シモンはまだどこにも嫁いでおらぬ）
シモンは今年で二十七歳だという。
十五歳で成人し、婚姻も可能になるこの国で、二十七歳の未婚女性はそれほど多くない。
ましてや高位貴族の女性の中には、ほとんどいない。
ルードビッヒの言葉に、コーネリアは目を見開いた。
（……シモンさまが、近衛第二騎士団副団長でいらっしゃるからですか？）
結婚した貴族女性は、相手の家に入り女主人として家を守るのが普通だ。
しかし、近衛第二騎士団副団長とまでなっているシモンが、その職を辞するのはそうそう簡単なことではないだろう。一般的な妻を求める男性にとって、シモンは結婚相手に向かない女性なのかもしれない。
しかし、コーネリアの質問に、ルードビッヒはフンと鼻を鳴らす。
（そんなものは、クロル伯爵家と姻戚関係を結べる魅力に比べれば、障害でもなんでもないだろう。……かえって、高い地位を持つシモンを欲しがる家も多いはずだ）
では、何故シモンはいまだ結婚していないのだろう？

ルードビッヒは、シモンのほうに静かに手を伸ばした。触れることのできない手で、彼女の頭をそっと撫でる。
（――もしも、シモンが他家に嫁げば、彼女のホルテンへの想いは未来永劫叶わなくなる。将来、奇跡的にシモンの気持ちに気づいたとしても、クソ真面目なホルテンが結婚している女性に手を出すはずがないからな）
それは、たやすく想像できることだった。
たとえシモンが結婚していなかったとしても、正式に自分の妻とすることのできない女性を、ホルテンが受け入れるかどうかは、疑問が残る。それでも、その可能性はゼロではないだろう。
（クロル伯爵には、シモン以外にも息子が二人、娘が一人おる。長男は、すでに同格の伯爵家の令嬢と婚姻し、子を三人なしている。ほかの子供達もそれぞれ結婚済みだ。……だからクロル伯爵は、シモンに結婚を無理強いしないのだ）
（……え？）
（純粋に家のためだけを考えれば、シモンも他家に嫁いだほうがもちろんいいに決まっている。だが、クロル伯爵はそれを、シモンの恋の可能性をすべて消してまで必要なことだと思っていないのだ。コーネリア、そなたには納得のいかないことかもしれぬ。それでもクロル伯爵は彼なりに娘を愛し、その幸せを祈っておる。……貴族にとって一番に優先すべきことは、家を――ひいては己の領民を守ることではある。しかし我らは家族の幸せを祈らぬわけではない）
ルードビッヒは、優しい目でシモンを見ていた。

その後、コーネリアは場所を変えて、シモンから女性としての王宮の心得を教わることになった。
移動した先は、近衛第二騎士団副団長の執務室。
同席したいというホルテンに、シモンは丁重に断りを入れる。
「女性同士の話ですから」
そう言われては、食い下がれないホルテンだった。
それでも彼はコーネリアを心配し、話の終わった頃を見計らって迎えに来ると言い出す。
シモンは、自分が必ず責任を持って送り届けるから、とこちらも断った。
「そうか。……お前がそこまで言ってくれるのならば」
渋々とではあるが、ホルテンは引き下がる。シモンに「頼む」と頭を下げてから、コーネリアのほうを向いた。
「コーネリア、私が離れては不安かもしれないが、シモンは信頼できる相手だ。遠慮せず安心して送ってもらうといい。もしもシモンの都合がつかなくなって送ってもらえなくなるようなことがあれば、誰かに言付けて、必ず私かジムゾンを呼ぶように。すぐに迎えに来るから」
「ありがとうございます。ご領主さま」
ものすごく心配そうなホルテンに、コーネリアは背中にゾクゾクと走る悪寒をこらえながら、丁寧に頭を下げる。
（……こ、怖い）

ホルテンの背後から、シモンが人を殺せそうな視線でコーネリアを睨んでいた。
（ご領主さまったら過保護すぎです！　シモンさま、絶対に誤解して、嫉妬していらっしゃいますよね。……陛下、どうしましょう？）
（いや、それは、誤解では――）
何か言いかけたルードビッヒの言葉は、おどろおどろしい空気をまとったシモンに遮られる。
「大丈夫です。お義兄さま。私が、必ず、確実に、彼女を連れて行きますから。……それよりも、お義兄さまは、お仕事がお忙しいのではないですか？　どうかお気になさらず、早く戻ってください。お義兄さまが財務長官に復帰されて、ようやく政務も普通に回りはじめたと聞いておりますけれど、まだまだたいへんなのでしょう？　本当に、あの役立たずの官吏ども。いっぺん絞めてやろうとは、常々思っているのですが――お義兄さまにご苦労をおかけするなんて、万死に値します！」
シモンは意気込んで語る。
いつもと変わらぬ義妹の調子に、ホルテンはフッと苦笑した。
「ありがとう。私を気遣ってくれて。シモン、お前は本当に優しいね」
たちまち顔を真っ赤に染めるシモン。
（……今のシモンさまは、優しかったのですか？）
（いや、違うだろう）
「役立たず」だの「絞める」だのいう物騒な言葉に引っかかったコーネリアの疑問に、ルードビッヒは深くため息をつきながら首を横に振る。

一〇〇％本気のシモンと、一〇〇％気遣いだと思っているホルテンだった。
最後まで心配そうな様子のホルテンを追い出したあと、シモンは、部屋の中にいたクロル伯爵家の使用人だというお付きの女性にも席を外させる。
そして――
「お前は、いったい何者だ？」
二人きりになって口を開いたシモンの声は……ひどく冷たかった。
自分がまだシモンから疑われているのを知って、コーネリアはちょっと落ち込む。
「コーネリア・サンダースといいます。ホルテンの領民です」
「そんなことは、知っている！」
忌々しそうにコーネリアを怒鳴りつけるシモン。
白魚のような指を赤い唇に近づけた彼女は、形のよい親指の爪先をイライラと噛んだ。
（やっぱり、まだ私を疑っていらっしゃるんですね）
（シモンは、疑り深いからな）
仕方がなかったとはいえ、そんな疑り深い人間の完璧な変装を見破ってしまった自分の不運を嘆く。
どうしたらいいのかと考えあぐねて返事のできないコーネリアに対し、シモンはさらに言葉をぶつけてきた。
「たとえ、親愛するお義兄さまに言われようが、私はお前を信用していない。お義兄さまは、お優

しいからな。ご自分の領地の民だというだけで、お前のような得体の知れない少女も懐に入れてしまわれる。本当に情け深く、寛大で、慈愛に満ちていて、紳士的で、心温かく、繊細で、清廉で、誠実なお方だわ」
ルードビッヒは、口をポカンと開ける。
（……よくもまあ、そこまで褒め言葉が出て来るものだな。わしが生きていた頃よりも、ホルテン大好き病が悪化しておるのではないか？）
呆れたようにそう言った。
一方、それを聞いたコーネリアは――
「そうなんです！　ご領主さまは、本当にお優しくて真面目な素晴らしい方なんです！」
感激に瞳をキラキラとさせて、シモンを見返した。
ルードビッヒは、頭を抱えて屈みこむ。
「さすが、シモンお嬢さまですね。ご領主さまのことをとてもよくおわかりになっていらっしゃいます。ご領主さまはお優しくて繊細なお方なのに、私の周囲の人は、なかなかそれを信じてくれないんです。シモンお嬢さまのお言葉を聞いて、安心しました。わかってくださる方もおられるのですね。あんなに素晴らしいご領主さまが誤解されているなんて、とんでもないことですから！」
熱意のこもったコーネリアの言葉を聞いて、シモンも目を輝かせた。
「お義兄さまが素晴らしい方だというのは、私が一番よく知っている。お義兄さまほど実直で、情に溢れた方はいない！」

「そのとおりだと思います！」
コーネリアとシモンは、熱い瞳を交わし合った。
（……いや、それはさすがにホルテンを買いかぶりすぎだと思うぞ）
冷静なルードビッヒのツッコミが、シモンはもちろん、テンションマックスなコーネリアに届くはずもない。
その後、コーネリアとシモンによるホルテン大好き自慢競争が繰り広げられた。
「私が小さい頃、お義兄さまは――」
「領地で、ご領主さまは――」
順番にホルテンの素晴らしさを挙げていく二人。
しかし、この勝負はやはり付き合いの長いシモンのほうに分があった。
コーネリアの話のネタが尽きても、シモンのホルテン自慢はまだまだ止まらない。
「さすがです。シモンお嬢さま」
「当たり前だ。私はもうすでに二十七年間も、お義兄さまを見守り続けているのだから」
長い白銀の髪をサラリと払い、胸を張るシモン。
それはもはや、ストーカーというのではないだろうか？
だが、そんなシモンを、コーネリアは尊敬の目で見上げる。
（二十七年……それは、生まれてからずっとということではないか？　生まれてすぐはさすがに無理であろう）

ルードビッヒは呆れ果てたように呟いた。
コーネリアの視線を真正面から受けて、シモンは少し面映ゆそうに目を伏せる。
そのまま何かを考え込み、やがて顔を上げた。
「こんなにお義兄さまのことを心行くまで語り合えたのは、久しぶりだ。コーネリア、お前はなかなかの者なのかもしれない。私には到底及ばないけれど――そうね、私の次にお義兄さまを理解していると認めてやってもいいわ」
突然シモンの口調が変わった。どうやら男らしい言葉遣いは表向きで、気を許した人間にはお嬢さま言葉になるらしい。
コーネリアは目を見開いた。
「本当ですかっ？　……あ、でも、ウッツさまがいらっしゃいますから、きっと私は三番目です。それでも、ご領主さまを尊敬する気持ちだけは、負けないと思っていますけれど！」
（いや、ジムゾンは、そなたらと張り合いたくはないと思うぞ）
そんなルードビッヒのツッコミは、シモンには聞こえないし、コーネリアにも届かない。
「私は、ジムゾンにも一番の座を渡すつもりはないわよ」
「さすがです。シモンお嬢さま」
どこかうっとりとコーネリアは言った。
フフフッと、シモンは笑う。
「……わかったわ、コーネリア。お前をお義兄さまの使用人と認めてあげましょう。まだお前への

疑惑がすべて晴れたわけではないけれど、お前はお義兄さまに害をなしそうにないもの」
「ありがとうございます！」
コーネリアは深々と頭を下げる。
（いつから、ホルテンの使用人になるのに、シモンの許可がいるようになったのだ？）
ルードビッヒの呟きは、やっぱり誰にも聞いてもらえなかった。
「さあ、そうとなれば、さっさと王宮のしきたりを教えてしまうわよ。そしてその後は、私が直々に、お義兄さまのステキなところをたっぷり教えてあげるわ」
感謝しなさいと、シモンは偉そうに笑った。
「ありがとうございます!!」
胸の前で両手を組み、再びうっとりするコーネリア。
この日、何故かここにホルテンファンクラブ（暫定会員三名：うち一名ジムゾンの意向は未確認）が結成された。
どうしてこうなった？　と、頭を抱えるルードビッヒだった。

◇

そこは、意図的に照明が落とされた薄暗い部屋。
昼間なのに分厚いカーテンが大きな窓にかかり、日差しを遮断している。

立ち読みサンプルはここまで

花も華美な美術品も一切ない、どこかガランとした室内。
その中央にある、機能性を優先させた重厚なソファーに、一人の青年が座っていた。
金の髪に青い瞳。整ったその顔は、女神のようだと称されるほどに美しい若者だ。
しかし、残念ながら彼の顔からは、一切の感情が抜け落ちている。
無表情で彼が見つめる先には、床に片膝をつき頭を下げる騎士がいた。
「結局、黒幕は探れなかったか」
「はっ。申し訳ありません」
騎士の白銀の髪が、なお低く下がる。
「よい。報告を続けろ」
無表情な青年――この国の王太子アレクサンデル・フォン・クレイヴ・ローディアは、淡々とした声で先を促した。
白銀の髪は揺れて、華やかな顔が上げられる。
紫の瞳が、王太子を真っ直ぐ見つめた。
騎士――近衛第二騎士団副団長シモンは、真剣な表情で口を開いた。
「流出した王家の私有財産はすべて、無事回収を終えています。現在、流出経路を個々に調査中ですが、判明しているどれもが一人の商人と関わっています。いまだ判明していないものも、おそらく同じ人物から流れたと見て間違いないでしょう。ただ――」
「肝心のその商人の行方が、わからないのだな？」